

ベートーヴェンの伝記研究の歴史と展望

平野 昭

1. はじめに

ベートーヴェンが没して1世紀と4分の3世紀を経た現在、新しい評伝を記述する可能性はどの程度あるのだろうか。ダールハウスが『ベートーヴェンとその時代』^(注1)の「まえがき」で指摘しているように、セイラーの伝記が作品解釈に関する歴史的コンテキストの叙述を断念しているという意味では、たしかにシュピッタの『バッハ』と同じレヴェルでの伝記とは言えない。また、フィンシャーは「ベートーヴェン研究の現在：課題としての諸問題」^(注2)という論考で「ほかの作曲家とは違ったかたちで伝記が錯綜していて、今もきわめて本質的な点で不明なことが多い」と言い、さらに「今日、一定の研究水準を非常に高いレヴェルでまとめた、信頼できる大部なベートーヴェン伝をあげることはできない」と断言する。両者の言葉はそれぞれ違った論考の前書きに、それぞれ違ったコンセプトから述べられたものであるが、主旨はセイラーの『ベートーヴェン』が伝記の基本文献として通用しない部分の多いいことを批判しているものだ。

しかし、生きた情報や資料と19世紀後半の人々からの聴取によって記述されたセイラーの伝記を凌駕する包括的な評伝を新たに記述することの困難さは言うまでもない。ただ、セイラーとその後継者たちが収集した膨大な資料は、現在では入手しえないものを多く含んでいるだけに、その重要性と価値の高さに変わりはない。つまり、新しい評伝の可能性のひとつは、セイラーの伝記を厳密に批判校訂し、必要な改訂と補足を加えるという方向のなかに見いだせるように思う。これがベートーヴェン伝記研究で行わなければならない最初の課題と言えるだろう。ちょうど作品全集の批判校訂作業の過程にさまざまな研究論文が発表されるのと同じように、伝記研究の過程に多くのモノグラフ的研究成果が現れてくることになるだろうし、それが再び伝記叙述のコンテキストのなかにフィードバックされるならば、包括的評伝により近づくことができるだろう。

2. 伝記研究の視点の変換

伝記読み直し作業の必要性は、20世紀が受容してきたベートーヴェン像が、英雄史観と進化論的史観に支えられながら美化された19世紀後半の伝記文学的記述への反省から生

じたものである。しかし、美化され神話化された英雄像を短絡的に捏造された虚像として否定するのは簡単であっても、そうした美化が生じた背景を考察することこそ現在の音楽学に課せられたひとつの課題であるように思われる。少なくともセイヤーの『ベートーヴェン』の叙述の姿勢に美化や神話化の意図は窺えない。それでも現在の視点から美化と判断されるような側面を社会学的観点から再考すれば、そこには19世紀後半におけるベートーヴェン受容の実態の反映を読み取ることも可能となるだろう。同時代者による証言等、当時だからこそ収集しえた豊富な情報が盛り込まれており、そこに当時の真実が語られていると肯定してみるのもクリティックの重要な側面だ。問題はこうした情報と資料を如何に批判し、再評価してゆくかということだ。

現在のベートーヴェン研究の主要な関心事に受容史研究がある。作品受容といつてもさまざまなレヴェルがあり、楽譜出版ひとつとっても原版 Originalausgabe 即ち初版譜だけに注目してきた従来の視点から一步踏み込んで、ベートーヴェン作品の普及、つまり受容に大きな貢献を果たしたはずのさまざまな編曲版 Übertragung に目を向ける必要性が生じている。ここから見えてくるのは、19世紀の人々は必ずしもベートーヴェン作品をオリジナルの形で受容していたのではないという、従来等閑に付されてきた問題だ。また、ここには編曲版作成者の問題、出版社の問題さらには次第に確立されつつあった初期の版権問題にまで言及しなければならない課題が見えてくる。もちろんここに出版収入という経済問題が絡んでくるのは言うまでもなく、歴史経済学やオーストリア経済史からの実証という、まさに学際的な研究の必要性さえ見えてくる。

こうした出版慣習や社会状況、経済状況等の生活に関わるミリューを明らかにして初めて市民音楽家ベートーヴェンの生涯を語ることができるし、評伝には相応しくない神話化の要因を指摘することも可能になるだろう。Critical biography、あるいは Kritische Biographie としての評伝が資料批判 Quellenkritik という意味での批判校訂の手順を踏んでいることは言うまでもない。つまり、評伝には文字通りの伝記という性格と同時に資料研究のひとつの表現形式という側面が備わっていなければならない。こうした新し評伝の可能性を探るために既存のベートーヴェン伝記および伝記研究に関する主要文献を概観しておくのも無駄ではないだろう。

3. 初期伝記からセイヤーまで

初期の伝記はベートーヴェンと同時代を生きた人々の証言や思い出、さらには同時代の新聞や年鑑等の出版記事を中心として編纂される。こうした記事や略伝はベートーヴェンの死の直後からさまざまな形で複数現れるが、今回はそのすべてを文献解題的に紹介するスペースはない^(注3)。ここでは後世のベートーヴェン像形成に大きな役割あるいは影響を及ぼした主要なものを取り上げておく。最も早いものにヨハン・アロイス・シュロッサー

の死者略伝的な伝記があるが、シュロッサーはプラハ在住で殆どベートーヴェンと直接的な交渉はなかったひとで、その価値は殆ど無視されていたものだ。しかし、これは從来 1828 年に執筆されたと考えられていたが^(注4)、すでにベートーヴェンが他界して半年後の 1827 年 10 月までに出版されていたことが明らかになっており^(注5)、さらに内容の信憑性を失っている。しかし、このシュロッサーの仕事がベートーヴェンの友人たちを刺激し、本格的な正しい伝記の執筆へと駆り立てたことは覚えておいてよい。なぜならば、このシュロッサーの略伝は 1831 年の時点になってまでもロンドンの『季刊海外誌レヴュー』やパリの『ルヴュー・ド・パリ』で紹介されていることから、全く影響がなかったと言えないからだ^(注6)。

実際問題として、ベートーヴェンの死の直後に伝記を執筆できる人物は、法廷法律事務官で甥カールの後見人であったホチエヴァール、ベートーヴェンの身辺の世話をしていたカール・ホルツとアントン・シンドラー、そして、ベートーヴェンのボン時代からの親友シュテファン・ブロイニングとコープレンツ在住のフランツ・ゲアハルト・ヴェーゲラーと弟子でありロンドンとの出版交渉などで多くの書簡を交わしていたフェルディナント・リースの 6 人くらいであっただろう。

先ず最初に重要な伝記を執筆したのはヴェーゲラーとリースであった。1838 年に出版された『伝記的覚書』である^(注7)。特にヴェーゲラーはボン時代のベートーヴェンについて豊かな情報を盛り込んでいる。これには 1845 年年になってヴェーゲラーが単独で出版した補遺卷がある^(注8)。そこにはヴェーゲラーやその妻エレオノーレに宛てたベートーヴェンの手紙やボンの公文書記録に取材したベートーヴェンの家族や家系についての情報まで盛り込まれている。次に現れたのがシンドラーによる『ベートーヴェン伝』^(注9)で、これは 1840 年に第一版が出版されると、翌 41 年にはモーシェレスによって英語訳され、ロンドンでも出版され、英語圏のベートーヴェン像の形成に大きな影響を与えることになった。シンドラーは 1845 年に改訂版を出版するが、1860 年になってから大幅な修正を加えた改訂第 3 版を出版している。ベートーヴェンを理想化して描きあげようとしたシンドラーの伝記は同時代のヴィルヘルム・フォン・レンツ^(注10)や A. B. マルクス^(注11)等の伝記記述にも大きな影響を及ぼした。

一方、あまりにロマン主義的な解釈と称賛に傾斜しがちな伝記に対して、もう一度一次資料を駆使して、厳正な評伝を試みようとする動きが現れ、1864 年にルートヴィヒ・ノールが 3 巻からなる『ベートーヴェンの生涯』^(注12)をウィーンで出版した。これを追うように 1866 年にベルリンで出版されたのがアメリカ人研究家アレキサンダー・ウィーロック・セイヤーによる 3 巻からなる『ベートーヴェンの生涯』^(注13)であった。

セイヤーのベートーヴェン研究の最初の動機はシンドラーの伝記を正確に英訳しようとすることにあった。ところが、その記述にヴェーゲラー＝リースの『覚書』と異なる点が多いことに気づき、自らの目で資料を確認するために 1849 年から何度もドイツやオース

トリアを訪れ、ベートーヴェンの書簡、日記、会話帳、裁判所等の公文書記録まで調査し、さらには友人たちの回想なども取材して、厳密な資料批判を加えて、シンドラーに代わる新しい伝記を記述はじめたのである。セイヤーはシンドラーの伝記の錯誤を批判し、広まった誤解を正すためにもこれをドイツ語で出版するという責任を感じ、ドイツの音楽学者ヘルマン・ダイタースの協力をえることになった。1866年から79年の間に出版したドイツ語版の3巻は、しかしながら、1816年までのベートーヴェンの半生を扱った未完成の伝記であった。セイヤーはさらに精力的に資料収拾を重ねていったが健康を害し、続巻を完成させることなく1897年に他界したのである。

セイヤーの収拾した資料と研究ノートはダイタースに託され、彼は先ず1901年にセイヤーの第1巻を改訂し、フーゴー・リーマンの協力を得つつ1907年に第4巻を完成させている。しかし、この巻の出版直前にダイタースは死去し、伝記編纂作業は最終的にリーマンに受け継がれたのである。リーマンは1911年になって第4巻と第5巻を完成させるが、さらに新しく発見された資料によって、すでにダイタースが改訂を加えていた第1巻を新たに改訂することで、1917年に全5巻を完成させたのである（注¹⁴）。一般にセイヤーの伝記と呼んでいるのは正確にはセイヤー＝ダイタース＝リーマン（以下TDRと略記）編の伝記なのである。

一方、アメリカのベートーヴェン協会の研究者であったヘンリー・クレービールは、セイヤーが英語で残した膨大なノートを参考にして英語による独自の伝記を編纂していた。現在ではクレービールがセイヤーの調査結果を自由に取捨選択していたことが明らかになっており、伝記としての価値を半減しているが、1921年に書き上げられたのがセイヤー＝クレービール編の英語版伝記である（注¹⁵）。1923年にクレービールが亡くなるとセイヤーの資料はエリオット・フォーブスの手に渡された。彼は戦後の新しいベートーヴェン研究の成果を踏まえて伝記の改訂編纂に取り組み、1964年に、現在でも信頼度を保っている英語版の伝記を出版した。これがセイヤー＝フォーブス編の伝記である（注¹⁶）。

以上のように20世紀になってからの伝記研究は例外なくセイヤーの半世紀に及ぶ資料調査に多くを負っているのである。しかし、当時としては厳密な資料批判の手続きをとったセイヤーではあったが、シンドラーの伝記からかなりの誤った情報を取り入れてしまっていた。それが明らかになったのは1970年代になってからであり、シンドラーが会話帳まで粉飾していたことにセイヤーが気がつかなかったことを責めることはできない。事実、ベートーヴェンの日記、書簡、会話帳の総合的で本格研究は現在ようやくその端緒についたばかりと言っても過言ではないのである。

4. セイヤー以後のモノグラフィー的伝記研究

情報量の豊富さと原語表記という点では依然としてTDRのドイツ語版伝記の価値は

高いが、これは1917年出版後に一度も本格的に改訂されていない。これに対し、約半世紀後にセイヤー自身の英語による調査ノート等を活用した書かれたセイヤー＝フォープスは、TDRと比すればコンパクトであり、引用資料が英語訳されているという弱点はあるが、「評伝」の性格をさらに一段階高めていると言えるかもしれない。セイヤー＝フォープスは大築邦夫訳（1971/74）によって日本語による標準的な伝記となっていた。ところが、ベートーヴェン研究は生誕200年の1970年と没後150年の1977年というふたつのメモリアル・イヤーを経て大きく進展し、セイヤーの伝記に多くの錯誤が含まれていることが明らかとなり、これに代わる伝記の必要性も叫ばれるようになった。

新しい評伝へ向けての第一歩は、先ず、資料研究の新しい成果を踏まえて既存の伝記の修正から始められることになるが、一方では、これまでになかった社会学、経済学、心理学等の観点からさまざまな新しい伝記的アプローチも試みられている。例えば、フィンシャーはマイナード・ソロモンの『ベートーヴェン』^(注17)を「最近書かれた最良の概説書」と評し、さらには、慎重な表現でソロモンの心理分析的な方法への強い傾斜を懸念した上で「新しいタイプの評伝」として高く評価している。また、18、19世紀の歴史経済学をも修めたジュリア・ムーアの著作『市場のベートーヴェン』^(注18)や論文『ベートーヴェンとインフレーション』^(注19)さらにバリー・クーパーの小さな論考『経済』と『家計』^(注20)等は当時の日常生活におけるベートーヴェンの姿を一層明確にするだけではなく、従来無反省に金額数字の羅列だけに終わっていた作品の出版収入や演奏会収益、受給年金額等が単純比較のできないものであることを歴史経済学的視点から明らかにしている。つまり、そこには、短期間のうちに激変するウィーンの貨幣経済の動向というミリュームを考慮する必要性が示されているのだ。社会学的なアプローチからはティア・デノラがウィーン時代の初期10年間における音楽家ベートーヴェンの社会的地位や貴族界及び音楽界における人脈を明らかにしながら、ウィーンにおける芸術パトロネイジの意味に踏み込んだ新しい研究成果を発表している^(注21)。

「生涯と作品」という意味での総括的な伝記とは異なるが、新しい伝記研究ではある特定の観点に絞ったモノグラフィーが、結果的には総括的伝記の読みを深めるのに大きな効果を發揮することにもなる。限られた歴史資料と情報を如何に読み、如何に解釈するかが重要となってくる。例えば、ソロモンの名を世界的に知らしめことになった「不滅の恋人＝アントニエ・ブレンターノ」^(注22)説には現在でも異論を唱える研究がある。ソロモンと同じ資料から出発しながらもゴルトシュミット^(注23)やテレンバッハ^(注24)の研究では全く異なる解釈によって「不滅の恋人＝ダイム伯爵夫人ヨゼフィーネ(ブルンスヴィク)」という結論に至っている。こうした研究者間にみられる解釈の大きな違いが、決定的な事実資料の不足に起因するのは言うまでもない。資料不足を補う可能性を秘めているのが、一見、周辺的と思えるさまざまな学際的方法によるアプローチかもしれない。とりわけ社会学や経済学等々の視点からの見直しが重要度を増している。信頼しうる資料に基づいて

飽くまでも実証主義を貫く立場を維持しつつ、点でしかない膨大な量の個別資料を関連性のある線として記述するために、従来の伝記研究にはなかった新しい観点からの解釈で間隙を補うことは、決して矛盾することではなく、今後の伝記研究で避けて通れない方法となるだろう。

5. 伝記研究と作品研究との相関

作品解釈に伝記情報が意味をもつ場合が少なくない。それは単に作品の創作過程や成立背景を明らかにすることではなく、作品の内容解釈に関わる問題である。作品研究にはさまざまな方法があるが、現在でもアメリカを中心として好んで採用されている方法にハインリヒ・シェンカーの分析理論がある。シェンカーが公刊した作品分析研究・「交響曲第9番」(1912)、「交響曲第5番」(1925)、「交響曲第3番」(1930) や最後のピアノ・ソナタ群 Op. 109, 110, 111 (1913~21)・は、よくある作品解説的分析ではなく、主題法と動機労作による主題展開法を詳細に跡づけたもので、見せ掛け上の主題や動機音形の本質が何であるかを、作曲段階のスケッチや自筆譜にまで逆上って論理的に解明しようとしたものである。例えば、「交響曲第5番」第1楽章に関する記述でシェンカーは「主要動機を正しく理解することこそ演奏と鑑賞の条件であるのだが、この主要動機は今日まで誤解されたままである。奇妙なことに専門の音楽家たちまで音楽の4小節の秩序を軽視しており、ベートーヴェン作品におけるこの秩序も見分けられなくなっている」と批判し、その原因がチャルニーやシンドラー等に由来するこの交響曲の第1楽章開始冒頭の連打音形の比喩的、意味論的な解説にあると指摘している^(注25)。

チャルニーもシンドラーも、ベートーヴェンが語ったという、もはや真偽を確認する術のない言葉を借りて、前者は「ほおじろの轡りの模倣」、後者は「運命はこう扉を叩く」と言ったわけだが、シェンカーはこうした説明は全く無意味で無価値と断言する。また、ヴァーグナーが1869年の『音楽新報(N Z M)』に発表した論文『指揮について』の中で触れている交響曲第5番の開始冒頭主題に見られる「フェルマータ」に関する論述箇所を例に挙げて批判する。フェルマータを伴った開始冒頭の主題に対するヴァーグナーの文学的な解釈を「チャルニー やシンドラーと同じように、連打音がもたらす、意味ありげな効果に毒されている」と糾弾し、「彼(ヴァーグナー)は絶対音楽とは全く無縁の人」と位置づける。

以上のようなシェンカーの批判は、彼が音楽作品を純粹に音楽固有の主題や動機の力学として捉え、それによって音楽の自律的な美を証明しうるという主義主張の裏返しでもある。一方、この対極に位置する作品解釈も両大戦間の時代に大きな勢力として支持されていた。ある意味でチャルニー やシンドラーの延長線上にあるとも言える、まさに解釈学的方法による作品研究を発表したのがアーノルト・シェーリングであった。彼は音楽作品を特

定の詩や劇と関連付けて論じる。『新しい解釈におけるベートーヴェン』(1934)^(注26)と『ベートーヴェンと文芸』(1936)^(注27)がその代表的な論文だ。今日、こうした作品解釈は、少なくとも音楽学研究の現場からはほとんど姿を消しているが、その影響が文学的な評論や一般音楽愛好家向けの作品解説などに色濃く及んでいることは否定できない。

音楽作品を文字による記述で解説しようという抑えがたい欲求がさまざまな方法論や理論を打ち立ててきた。シェーリングの理論をアンチテーゼとして誘発させたとも言える作品研究がシェーリング以前にあった。第一次大戦直後の一世を風靡したエネルギー主義と呼ばれた音楽様式研究である。力と空間と物質という物理学の概念で音楽を分析しようとした代表的な論文に、アウグスト・ハルムの『音楽の二つの文化について』(1920)^(注28)やグスタフ・ベッキングの『ベートーヴェンの個人様式：スケルツォ主題』(1921)^(注29)そしてハンス・メルスマンの『音楽のジンテーゼ（統合）』(1922)^(注30)等がある。結果的にエネルギー主義はシェーリングやシェンカーの理論の影に急速に沈んでいった。

作品解釈をめぐる問題は美学を大きく発展させたが、基本的には解釈の二極化を表面化させるものであったように思われる。音楽を絶対音楽的に解釈するか、あるいは標題音楽的に解釈するか、という二つの姿勢であった。ただ、ここで見落とせないのは、そうしたさまざまな解釈姿勢が時代の思潮、文化、さらには政治に大きく左右されていたということである。つまり、解釈姿勢は歴史受容の問題と密接に連関しているということである。絵画や彫刻や建築さらには文学等の諸芸術と異なり、本質的に抽象的な音と時間という素材によって表現される音楽芸術を解釈、理解しようという欲求は、不可避的に言葉による解説に結びついてゆく。音楽作品の本質を真に理解しようとする場合、対象を絶対音楽的な構造と捉えて、純粹に音楽的な法則から解き明かそうとする姿勢と、作品は何らかの思想の表明もしくは表現であり、作曲者のメッセージが託されたものであるという解釈学的な姿勢の二つの立場が生まれてくる。しかし、いずれの場合も作品の成立過程や成立背景を知ることは等しく重要であろうし不可欠であろう。

例えば、《エロイカ》交響曲の成立を巡っては、ベートーヴェンが自筆スコアに一度は記したナポレオンへの献辞を破棄したという事実についてさまざまな解釈が行われたのは周知のことだが、そうした作品成立事情を知らなくても、この作品の自律した美を理解することは可能であろう。しかし、1810年代から20年代にかけてドイツ、オーストリアだけでなくイギリスにおいても大人気を博した《ウェーリントンの勝利、あるいはヴィットリアの戦い（戦争交響曲）》の解釈においては、その作曲動機や目的、成立背景などを知ることが、解釈学的な作品解説にとって必要であるだけではなく、作品の価値を客観的に評価しようとする音楽の自律的な美を論じる場合にも有益な情報となるだろう。どのような意図で作曲されたかを知った上でなければ、作品の正しい解釈はできないからである。従つて、作品解釈のためにもベートーヴェンの生き方、考え方、当時の生活状況を詳しく描いた伝記が要請されるのである。

6. 新しい「評伝」のための重要資料となる『書簡全集』と『会話帳』

ダールハウスとフィンシャーの新しい評伝の可能性に対する悲観的あるいは消極的発言は、裏返せば、史実において客観的であって推察において実証主義的であるような信頼しうる伝記への強い要請であるようにも思われる。彼等の悲観的観測には、しかしながら、今後大きな発展可能性を残している書簡集と会話帳の研究成果が考慮されているようには思えない。新しい「評伝」を可能ならしめる最大の資料は、セイヤーの時代には十分に利用することのできなかった書簡集、会話帳、日記帳である。

これらの一次資料の存在が今まで知られていなかったわけではない。ベートーヴェン書簡集の編纂も早くから試みられていた^(注31)。しかし、20世紀初頭に次々に現れたライツマン編(1907~10)、プレリンガー編(1907~11)、カリッシャー編(1908~11)の書簡集各5巻は、編纂姿勢に学問的な厳密さが欠け、収録したものが全く場当たり的な取捨選択であった上に、未収録の書簡が500通以上もあったという理由から、現在ではほとんど利用されていない。そうした早い時期の書簡集で現在でも利用価値を持ちつづけているのは、カストナーとカップの共同編纂によって1923年に出版されたドイツ語版である^(注32)。

また、英語圏の研究者が現在でも頻繁に引用するのはエミリー・アンダーソンによって英訳編纂された3巻からなる選集(1962)である^(注33)。ベートーヴェン独自のドイツ語の言い回しや言葉の遊びが犠牲になってはいるが、学問的な批判精神をもって編纂されている点で価値は高い。言うまでもなく、書簡は私信であって、その性格上、決してベートーヴェンの遺品のなかに残されるものではなかった。これを収集するという作業は想像を絶する困難さを伴い、実際に書かれたものの何割が収集されたのかも判らない。

例えば、1957年になって初めてヨーゼフ・シュミット=ゲールクによって発見され、公表された『ダイム伯爵夫人ヨゼフィーネに宛てた13通の未知なる手紙』^(注34)は、未発見資料の存在の可能性を示すものであった。しかも、このシュミット=ゲールクの発見は、当時「不滅の恋人は誰か」という重要な論争に大きな波紋を呼んだのである。これによってヨゼフィーネ・ダイムがその恋人候補として大きくクローズ・アップされたが、1972年になって、ソロモンが発表した論文^(注35)により否定され、一転して不滅の恋人=アントニエ・ブレンターノ説が浮上し、半ば定説化されて現在に至っている。

1996年になってベートーヴェン・アルヒーフがプランデンブルク編纂の『書簡全集』全7巻の刊行を始めた^(注36)。第6巻までに全2292通を収録し、年代と場所が未記入の書簡もプランデンブルクによる年代推定と発信場所の特定によって、年代順に新しい番号付けて編纂されたのである。第7巻には既存のカストナー=カップ編およびアンダーソン編の整理番号との対照表や人名索引等が整備されている。この『書簡全集』の利用価値が大きいのは、ベートーヴェンに宛てて書かれた多くの書簡と返信もあわせて収録している点

である。これによって、作品出版をめぐる出版社との交渉の経緯が一層明らかになるばかりか、ベートーヴェンが送った書簡だけでは意味不明であったような文章内容や当事者だけ諒解できるような暗号的な言葉や書き手の真意まで明らかになるケースも少なくない。

このプランデンブルク編と軌を一にするかのように、セオドア・アルブレヒトの編纂英訳による3巻からなる『ベートーヴェンに宛てられた書簡および他の通信』(1996)がアメリカで出版された^(注37)。2種類の書簡集の出版は最近のベートーヴェン研究の大きな成果のひとつだ。

一方、『会話帳』も戦前にゲオルク・シューネマンによって編纂が進められ、大戦中に3巻が出版された(1941~45)^(注38)が、1968年から新たにK.H.ケーラーとG.ヘッレを中心にD.ベック、G.プロシェの4人が編纂を進め、各巻末に膨大で詳細な注釈をもつた全10巻を四半世紀をかけて出版した^(注39)。

『書簡全集』と『会話帳』のふたつの資料をつき合わせ、日付をさらに正確に特定してゆく作業を進めれば、少なくともウィーン時代のベートーヴェンの生活状況はこれまで以上に詳しく描きだすことが可能となる。事実、1977年の国際ベートーヴェン学会でベックとヘッレが発表した論文「会話帳の伝承に関するいくつかの疑問」^(注40)はシンドラーの伝記内容の多くが史実に反することを証明するものであった。晩年のベートーヴェンの側近を自認していたシンドラーによる初期の伝記は、19世紀後半には絶対的な信頼度を誇っていたし、セイヤーも独自の再調査と批判を加えた上で、多くの情報をシンドラーの伝記から得ていた。ベックとヘッレの研究は、それ自体は『会話帳』編纂過程から生じた疑問に発する小さな論文ではあったが、その波紋は大きく、従来の伝記研究を根底から揺るがすものとなつた。また、児島新が1981年の国際音楽学会バイロイト大会で発表した「第九の初演」に関する論文も『会話帳』を活用した先駆的な研究のひとつであった^(注41)。

7. メモリアル・イヤーに現れる新しい研究視野

前述のベックとヘッレの研究発表は、ベートーヴェン没後150年を記念して行われた国際ベートーヴェン学会の場で行われたものである。大作曲家の生誕・没後を記念する年に国際レベルで開催される大小さまざまなコングレスやシンポジウムは、これに向けて周到に準備されていた貴重な研究成果が一挙に公表される。ベートーヴェンでは生誕メモリアル・イヤーの7年後に没後メモリアル・イヤーが続くというパターンが半世紀毎に巡ってくる。1870年の生誕100年祭は、まさに祭と呼ぶに相応しいドイツの特殊な社会情勢の中で迎えられ、ここで19世紀後半から20世紀前半までを支配するベートーヴェンの英雄像が決定的なものになった感がある。若い時代からベートーヴェンに心酔し、27歳のときはパリで小説『ベートーヴェン巡礼』(1840)を出版して自らの内に一種神格化されたベートーヴェン像を描いていたヴァーグナーは、1846年にはドレスデンで「第九」を指揮し、

さらにこの作品に関する講演や評論まで書いていた。1870 年に著した評論『ベートーヴェン』では「ベートーヴェンの生誕が意味するものをドイツ軍の勝利が意味するもので補うがよい。ドイツ的な行為の力をベートーヴェンの音楽で満たされた心の力によって感じとればよい・・偉大なベートーヴェンのこの作品が諸君をドイツ精神の最も高貴な行為へと導くことになる」と述べている。

この時期のドイツは 1864 年の対デンマーク戦争、66 年の対オーストリア戦争、70 年の対フランス（普仏）戦争に相次いで勝利し、翌 71 年に鉄血宰相ビスマルクによってはじめて統一ドイツが誕生するという民族意識の高揚の中にあった。この気運は 1877 年のベートーヴェン没後 50 年の記念の年に向かってさらに高まっていった。

こうしたドイツ精神は半世紀後の 1920 年の生誕 150 年記念におけるアーノルト・シェーリングの講演の中にも聞くことができる。ドイツは開戦時にこそ優位に立っていたが、第一次大戦の結果は惨敗であった。シェーリングの講演はその直後に行われている。シェーリングは、「1 本の強い絆が今日でも私たちとベートーヴェンを結び付けています。ひとつの思想が私たちの我が民族の力への信頼を揺るぎなく維持させています。1914 年に私たちを戦いと勝利に導いた倫理的理想的主義、それはベートーヴェンの音楽の精神的背景となっていた理想主義なのですが、それが今もまだ私たちの中に死に絶えることなく生きています・・・私たち一人一人が自分の向上に必要とする分だけ、ベートーヴェンの生気に満ちた力を自分の内に充溢させること、それが私たちのしなければならないことです」と述べている（注 42）。

没後 100 年の 1927 年に生地ボンにベートーヴェン・アルヒーフが設立された。ボン時代のベートーヴェンを描いた初期伝記『若き日のベートーヴェン』（1925）の著者ルートヴィヒ・シーダーマイヤーがヨーゼフ・シュミット＝ゲールクを助手として、既に 19 世紀末に設立されていたベートーヴェン・ハウス協会の付属研究機関としてアルヒーフを設立したのである。母体のベートーヴェン・ハウス協会は、老朽化のために取り壊しの危機に瀕していたベートーヴェンの生家を保存しようとするボン市在住の名士 12 人によって 1889 年に設立されたもので、この建物を買収してベートーヴェンの記念館博物館とする壮大な計画が推し進められていた。全世界に呼びかけた設立趣意書は大反響を呼び、500 名を越す人々が趣旨に賛同して協会会員となり、世界各地でベートーヴェン・ハウス設立と管理運営の基金作りのための慈善演奏会が開催された。

この間、ベートーヴェン・ハウスは精力的にベートーヴェンの自筆譜や書簡、肖像画等を収集し、記念館の一部に常設のコレクション展示場を設けるまでに至った。年々増えてゆく貴重な資料を学問的に研究しようという気運が高まる中で没後 150 年を迎えたのである。その後、1956 年にスイス人のハンス・コンラート・ボートマーの膨大なプライヴェート・コレクションのすべてがこの協会に遺贈され、これにより、ベートーヴェン・ハウス協会とアルヒーフは文字通り世界のベートーヴェン研究の中心機関となった。アルヒーフ

は設立以来、研究と平行して貴重な資料のマイクロフィルム化、ファクシミリ化による永久保存を大きな目的に掲げていた。また、最も重要な研究プロジェクトとしての作品全集（1959 刊行開始、2000 年現在、交響曲の第 3 ~ 9 番が未公刊であるが、全体の約 8 割が既刊）とスケッチ帳全集（1952 年刊行開始）と前述した書簡全集（1996~98）の批判校訂版の編纂と出版事業に従事し、研究成果を数種類の会報や年報の形で逐次けにしている。

8. 新しい研究としての受容史の見直し

学問は先行研究の消化吸収とその批判によって進展する。大方の研究に認められる基本的理念だ。しかし、批判はともすると過去の業績の否定になりかねない。批判校訂版楽譜の編纂姿勢にはとりわけそうした方針が強く現れる。自筆譜やスケッチ、さまざまな手稿写本の詳細な比較研究を経て編纂される批判校訂版を最もオーセンティックな楽譜とする考え方だ。そうした、いわゆる原典主義は音楽実践の場ではオリジナル楽器による演奏の形で現れる。ふたつのメモリアル・イヤーを過ぎた 1980 年頃から現れたオリジナル楽器オーケストラによるベートーヴェン交響曲の演奏は、その後 20 年に渡って次々に新しいオーケストラを生み出し、その都度センセーショナルな全曲演奏および録音全集を世に送り出してきた。指揮者なしでスタートしたハノーヴァー・バンド、そして 18 世紀の演奏様式を自ら研究した指揮者ノリントン、ホグウッド、ガーディナー、ブリュッヘン等による演奏が音楽界にもたらした影響の大きさにははかり知れないものがある。さらにマルコム・ビルソン、ロバート・レヴィン、メルビン・タン等のフォルテピアニストによるソナタ演奏が、モダン・ピアノの演奏では想像もできなかつた新鮮な音楽の姿を見せてくれている。

楽譜の校訂にせよ、オリジナル楽器演奏にせよ、彼らの活動の原点には、ベートーヴェンの死後、19 世紀から 20 世紀半ばころまでに蓄積されてきた濃厚なロマン主義的解釈に対する批判精神があった。これは学問的な姿勢から正当化されるものであり、こうした姿勢は将来的にも支持されてゆかなければならない。一方、現在の研究では社会学的な観点からの音楽受容史研究が大きな潮流となっていることも忘れてはならない。例えば、改竄版楽譜の流布やそれによる演奏でさえ、見方を変えれば、そこから、それを受容した時代の音楽趣味や音楽観が見えてくる可能性がある。

同じことが伝記研究にも言えよう。シンドラーの「伝記」に見られる粉飾や改竄を批判することの学問的正当性を楯にして、今日の伝記研究は実証主義的な方向で推進されているが、ここでも別の視点からの受容史研究が必要となるだろう。文学的粉飾や英雄史観を背景とした偉人伝的な伝記が打ち立てた 19 世紀のベートーヴェン像を否定し、脱神話化の傾向が無反省に進めば、歴史を見る目を失うことにもなりかねない。21 世紀のベートーヴェン研究では、例えば、西原稔が「なぜベートーヴェンは偉大なのか・・・19 世紀の政治力学のなかの音楽」^(註 43)で考察しているような 19 世紀のドイツ精神と理想主義を踏まえ

たベートーヴェン受容論のように、当時の美学を再検討し、それによって考察することが必要となるだろう。当時の美学で見直すということは、後世の受容史だけに負わされた課題ではない。ベートーヴェン生存中の作品受容にとっても重要な問題である。例えば、フィンシャーの『エロイカ』論^(注44)やブランデンブルクの「第九」論^(注45)には、18世紀後半から19世紀初頭にかけての美学理論が導入されており、従来の作品研究では議論されなかった初演当時の人々が抱いていたであろう音楽的一面が浮き彫りにされている。

発展史的観点あるいは進化論的な観点から理想化した論を構築するのではなく、分化史と社会史、さらには政治や経済の観点も踏まえて、当時の美学思想により読みなおすことが重要な課題となってくるだろう。

注

注 1) Dahlhaus, C. : Laaber, 1987. ダールハウス著、杉橋陽一訳『ベートーヴェンとその時代』東京、西村書店、1997。

注 2) 大宮眞琴・谷村晃・前田昭雄監修『鳴り響く思想···現代のベートーヴェン像』東京 東京書籍、1994。フィンシャー論考「ベートーヴェン研究の現在：課題としての諸問題」(前田昭雄・藤本一子共訳) p. 8~23。

注 3) ベートーヴェンの伝記に関する日本語の文献情報は音楽事典の参考文献表に基本的なものが紹介されているが、欧文文献の参考一覧と解題を要領よくまとめた西原稔編の文献解題『ベートーヴェン事典』(東京、東京書籍、1999、p. 673-735)がある。

注 4) 児島新も『音楽大事典』(平凡社、1983) 第5巻の「ベートーヴェン」項目の研究史の記述中にシュロッサーの伝記を1828年として紹介している。p. 2255。

注 5) J. I. ホチエヴァールはシュロッサーが編纂した伝記に対する批判を1827年10月6日付けの『ウィーン劇場新聞』に寄稿しており、この時点で既にシュロッサーの伝記が公になっていたことがわかる。

注 6) , vol. 8, p. 439, 1831, London., vol. 33, p. 379, Paris.

注 7) Wegerer, G. & Ries, F. : Coblenz, 1838.

注 8) Wegerer, G. : 1845.

注 9) Schindler, A. : Munster, 1840, 21845, 31860.

注 10) Lenz, W. v. : Berlin, 1855.

注 11) Marx, A. B. : Hildesheim, 1859.

注 12) Nohl, L. : Wien, 1864

注 13) Thayer, A. W. : Berlin, 1866.

注 14) Thayer-Deiters - Rieman : Berlin, 1917.

- 注 15) Krehbiel, H. (ed.) : New York, 1921. 相良末夫訳『ベエトオヴェン伝』全2巻、東京、梁塵社、1942／43。
- 注 16) Forbes, E. (ed.) : Princeton, 1964. 大築邦雄訳『ベートーヴェンの生涯』全2巻、東京、音楽之友社、1971／74。
- 注 17) Solomon, M. : London, 1980. 徳丸吉彦・勝村仁子共訳『ベートーヴェン』全2巻、東京、岩波書店、1995。
- 注 18) Moore, J. : Oxford, 1993., 及び、Ph.D. diss. University of Illinois, 1987.
- 注 19) Moore, J. : in, Nebraska, 1992.
- 注 20) Cooper, B. :
- 注 21) DeNora, T. : in Nebraska, 1993.
- 注 22) Solomon, M. : in 1972.
- 注 23) Goldschmidt, H. : . Leipzig, 1977.
- 注 24) Tellenbach, M-E. : Zurich, 1983.
- 注 25) Schenker, H. : . Wien, 1925 (r. 1969).
- 注 26) Schering, A. : Leipzig, 1934.
- 注 27) Schering, A. : Berlin, 1936 (r. 1973).
- 注 28) Halm, A. : Munchen, 1913, rev. 1920, 3/1947.
- 注 29) Becking, G. : 1921.
- 注 30) Mersmann, H. : Berlin, 1922.
- 注 31) これ以外の主な書簡集にDagmar Weise(1953/54), Donald MacArdl & Ludwig Misch(1957)があるが、現在ではほとんど参考に) れない。
- 注 32) Kastner, E. & Kapp, J. : Leipzig, 1923.
- 注 33) Anderson, E. (transl. & ed.) : London, 1961.
- 注 34) Schmidt-Gorg, J. : Bonn, 1957.
- 注 35) Solomon, M. 前掲の註20のMQに発表した論文の他に" "を雑誌 1977 に発表している。
- 注 36) Brandenburg, S. (herausgegeben) : Beethoven-Haus Bonn, 1996-98.
- 注 37) Albrecht, Th. (transl. & ed.) : Lincoln, 1996.
- 注 38) Schunemann, G. (herausgegeben) : , Wien, 1925.
- 注 39) Kohler, K-H.- Herre, G. Beck, D. Brosche, G. (herausgegeben): Leipzig, 1968-96.

注 40) Beck, D. & Herre, G. : in 1978.

注 41) Kojima, Shin A. : in s. 390-97, Gesellschaft fur Musikforschung, Barenreiter Kassel & Basel

注 42) Schering, A. : Leipzig, 1921. シェーリングはライプツィ大学音楽美学教授の後、1920 年にアーベルトの後任としてハレ大学の音楽学教授に就任し、折しも生誕 150 年を迎えたベートーヴェンについての記念講演を行った。『ベートーヴェンとドイツ觀念論（ドイツ理想主義）』（1921）収録。

注 43) 西原稔のこの論文は『現代思想』12 月臨時増刊号「もうひとつの音楽史」（1990）収載。ドイツ精神の倫理的理想的理想主義やベートーヴェン受容と社会的階層化について論じている。

注 44) 『ベートーヴェン全集』第 3 卷（東京、講談社、1998）

注 45) 本年報、別項（藤本一子訳）